

## 特集：産学連携による教育システム情報学の価値創造と今後の展開

学術界と産業界の相互理解イベント：  
ラーニングイノベーショングランプリ

東本 崇仁\*, 柏原 昭博\*\*

Cross-Fertilization Events between Academia and Industry:  
Learning Innovation Grand Prix

Takahito TOMOTO\*, Akihiro KASHIHARA\*\*

This paper describes Learning Innovation Grand Prix, one of the events for academic-industrial alliance. Learning Innovation Grand Prix is one of the attempts of mutual understanding to solve the disagreement of understanding which is a big gap in the academic-industrial alliance. In this paper, we introduce the Learning Innovation Grand Prix as an academic-industrial alliance that researchers can start immediately, and describe its establishment and characteristics. We also describe the history of the Learning Innovation Grand Prix, where academia and industry have worked together for mutual understanding.

キーワード：産学連携，ラーニングイノベーショングランプリ，相互理解，教育実践

## 1. はじめに

「自分の研究を実践・運用したい」という思いは、教育システム開発に関わる人なら常に持ち続けているものだと思われる。実践という言葉でストレートに思いつくのは「教育現場（特に教育機関）」における実践であり、本学会の研究者も実践されている方が多いように思われる。しかし、個々の研究者が真に実用に耐えうる作りこまれたシステムを開発することや、継続的に運用を行うこと、あるいはより広い範囲での運用を行うことは容易ではない。そこで、もう一つの「実践」に関わるキーワードは「産学連携」であると著者は考えている。多くの研究者が個として、あるいは複数の個として活動しているのに対し、産業界と手を組めば組織的に活動できる。これにより、学術界が発案したアイデアを産業界が実用的なレベルで実装することや、産業界の力を借りた継続的な大規模運用な

どが可能となり、実践のための大きな力となる。

本学会においても、実際に産業界の方と手を組み、活発に研究を推進されている方も多くいらっしゃる。しかし、その多くは「大学に所属する研究者」として産業界と手を組んでいる、つまり大学が産学連携を仲介することで成立しているケースが多いように思われる。筆者の感覚ではあるが、一研究者が企業の方と手を組みたいと願ったとしても、その実現は決して容易ではない。「実際にどのように産学連携をスタートしてよいかわからない」「どうすれば産業界の方に自分の研究の価値を理解してもらえるかわからない／理解してもらえるとは思えない」、など、非常に多くの壁が存在するためである。事実、私東本も思春期の青年が「彼女が欲しいな」とつぶやきながらも行動を起こさないように、「産業界の方と連携したいな」とつぶやくのみであったように思う。そんななか、本稿のタイトルでもある「ラーニングイノベーショングランプリ

\* 東京工芸大学 (Tokyo Polytechnic University)

\*\* 電気通信大学 (The University of Electro-Communications)